

警戒区域で生きる松村直登さんと子牛の石松の誕生 —山本宗補の雑記帳より—

全域が警戒区域となっている富岡町の自宅で生活し続ける松村直登さん(52歳)の生活の一旦を



見せてもらった。自宅は福島第一原発から南南西に約12kmの辺り。松村さんが生まれ育った自宅は、周辺に民家はまばらな森の中にあつた。電気も水道もない状態で、飼犬のアキと拾ってきた放浪癖のあるタロウの二匹、それに二羽のダチョウが飼われていた。(追記:ネコもいることを忘れていた)撮影は4月18~19日。

自宅に着いてまもなく、松村さんの携帯に連絡が入り、同じ町内で牛のお産の現場に行くことになった。そこからは松村さん自身も未経験の牛の出産から、生まれたばかりの未熟児の子牛の面倒をみるという予想外の展開となつていった。

子牛の前足と頭の一部だけが見えていた。

お産の現場は3月に放れ牛の移動の手伝いで来たことがあり、富岡町役場の近くだった。民間の創生水という会社が水を使った「除染実験」目的のためにトラックで何度も運んだ囲い込みだった。片隅でガリガリに痩せ細った母牛が泥の中に倒れ込んだまま子牛

を産もうとしていた。この柵の牛たちに水とエサをやるボランティアをかって出ている遠藤カズオさんが、難産の子牛を一人では引っ張り出せないとのことで、松村さんが救援に駆けつけたわけだ。(追記:この民間会社による除染実験は、遠藤さんによるとまだ開始されていないようだ。会社のWebを見ても情報の更新も少ないし中身がない。

で前足に縛ったロープを何度か引っ張ると、子牛がやっと飛び出た。松村さんはワラを引いた上に、産まれたばかりの子牛を置き直した。独力では向きを変えることもできないほどに、未熟で立つとする本能も余力もなかった。放つておいたら、母牛と子牛も共倒れだったと思える状況といえた。もちろん、現場は警戒区域で獣医さんが飛んでくるところではない。

時間の経過とともに、子牛の表情から希望が感じられるようになった。母牛は骨がガリガリで、オツパイが張っていないため、子牛に飲ませようと松村さんがほ乳瓶に初乳を絞った。ほんのわずかしかなかったが、遠藤さんが子牛の口を開いて初乳を何とか飲ませることに成功した。申請中のNPO「ガッツ福島」(代表は遠藤さん)にちなんで、子牛を「石松」と名付けたのは遠藤さんだ。子牛の「石松」が誕生した囲い込みの牛たち。40頭ほどいる。創生水という民間会社による除染実験の目的で殺処分は免れている。(追記:空間線量は5マイクロシーベルト/時をこえる。囲い込みに隣接する畜産農家の家の庭先では、50マイクロシーベルト/時をこえて

しまう雨水が流れ込む地面もある)倒れ込んだまま、子牛にオツパイをやろうとすることもなく、身動きしなかった母牛を、松村さんたちが懸命に引っ張り起こして、柵の外に連れ出した。胎盤が出てきたのはしばらくしてからだった。いづらか落ち着いたのか、エサのワラをやっても食欲を示さなかった母牛だが自ら青草を食べ始めた。他の牛たちに角で突かれて皮がむけた傷あとが身体中にあつた。エサを満腹に食べることができなかったことを物語っていた。ここまででお産から3時間経過している。母と子の動きを見つめる3人。だが、母牛はオツパイをやろうとする素振りはない。子牛の「石松」は、立つのもやつのことで、オツパイを探ろうとする本能は希薄で素振りがない。一計を案じ、松村さんは母牛をつないで、石松にオツパイを吸わせようと股の間に何度か入れてみたがダメだった。石松は前足の間に



オツパイがあると勘違いの素振りばかりだった。松村さんたちが「石松」を懸命に生かそうとしたが、「石松」の運命を暗示しているようだった。母牛がなめたりして、身体のぬめりがすっかりとれ

た「石松」だが。「石松」の続編に入る前に、松村さんが自宅で生活し続ける富岡町と原発との関係、富岡町がどんな町で被害状況はどのようなかを知らずには「石松」誕生物語の背景はわからない。というよりも、その背景を知らずに、石松のような未熟子牛がなぜ産まれてしまったのか、なぜ母牛が他の牛たちのイジメに合い、エサも満足に食べられずに痩せ細ったまま子牛を産まなければならなかったのかという現実を抜きに理解されかねない。その意味で単なる動物愛護だけの観点で「石松」誕生物語を捉えてほしいとは思わない。そこでまずは以下の写真を見ていただきたい。富岡町の夜の森公園の桜並木はとりわけ有名。たまたま通りがかったら、大手メディアを入れた撮影日となっていた。富岡第二小学校の桜も満開。校庭の空間線量は地上から 50 cm ほどで 5.7 マイクロシーベルト/時。福島第一原発から 9^{キロ}。除染して子どもたちが通学し、校庭で遊べる環境だろうか？それ以前に若い世代が帰還して日常生活が送れる環境とは言い難いが、人口 16000 人弱の富岡



町には東電福島第二原発4基がある。原発誘致に伴い、莫大な固定資産税や交付金が自治体収入となる。原発マネーと思われる箱物の一つがこの[「富岡町健康増進センター リフレ富](#)

[岡](#)」。Web で見ると、温泉、プール、トレーニングジム、宿泊施設まで完備されている。富岡町役場も重厚な建物で、隣接する図書館を兼ねた「文化交流センター学びの森」も実に大きな箱物だ。福島第二原発の建屋が海岸から見えた。福島県議会が脱原発決議をしているにも関わらず、東電は第二原発の廃炉を決定していない。この後に及んでもなお、国の出方を見てから判断するといっている。国民の税金でしか賠償金を支払うこともできない事実用倒産した電力会社ということと、事故を起こした責任を認識しようとしなのではないか。海岸地帯の大津波による被害は甚大だが、警戒区域のために住宅の片づけは手つかず。後ろは第二原発の排気塔。この辺りの空間線量は 0.7 マイクロシーベルト強/時ある。JR 常磐線富岡駅周辺は壊滅的な被害を出した。駅舎はない。ガレキとなった自動車が駅周辺には何十台も残されていた。原発から 10^{キロ}強にある畜産牧場は、牛舎で餓死した牛たちの死骸が全く片づけられないままだった。元々は養豚業を営んでいたと思われる牧場だ。狭いスペースに二頭が詰め込まれ飼育されていたと思われる。事故前からの畜産業者の姿勢が問われる現場といえた。野良犬となった首輪をつけた犬が死骸を食らっていた。放れ牛の多くが生き延びた一方で、水もエサもないまま、多くの家畜が息絶えていった地獄となっていたことがわかる。事故後の 4 月 22 日に警戒区域となった立

入禁止区域は、原発事故が生み出した動物たちの地獄だ。人の



都合で飼育され、棄てられた家畜もペットも哀れだ。住民さえも棄民する国だといえれば驚いてももらえないが。

原発事故当時、建設業に従事していた松村さんは常磐高速道路の建設工事中だった。地震で古い木造二階建ての家はペシャンコに崩壊したが人的被害はなかった。普段生活していた自宅には 80 代の両親がいたこともあり、近所のおばさんと 4 人での避難しない生活が始まった。停電だったが、プロパンガスで煮炊きができ、大型冷凍庫には食料が保存されていて、飲み水は沢の水を引いて間に合わせたという。老いた両親の手伝いをして作った米もたくさんあった。タラの芽などの山菜も、川魚も平気で食べたと話した。庭先のビワの大木に鈴なりとなったビワもたらふく食べたという、ほぼ自給自足の生活は、政府が 20^{キロ}圏内を警戒区域に設定する 4 月 22 日前後まで続けた。自分が寝泊まりできる仮設住宅は三春町に確保し、両親は県外に避難させた。



松村さんの家だけ放射線量が低いはずもない。現に、庭先で計ると1.7マイクロシーベルト/時ある。仮設のある三春町ははるかに低いし、4月に帰村しはじめた川内村役場の線量と比しても5倍以上ある。どこへ行くにもマスクなしの松村さん。放射能の影響はもう考えないようにはしていた。50代はじめという年齢からすれば、健康への影響は熟慮したほうがベターなはずだが、「希望の牧場」代表の吉沢さんと同様に、自らの被曝と引き替えに、どこかやぶれかぶれとなって国の指示に抵抗する生き方を感じる。

事故後の4月。松村さんは東電本社に単身乗り込んでどなりつけたこともあるという。地震によって崩落した屋根を修理したくても住民も業者も立入できない現状に対し、東電が住民に代わって応急修理するべきだと実施させる結果につながったと話した。

松村さんは、殺生は嫌いな性分から、残されたペットの犬やネコなどにエサをやり始めたが、今では富岡町に残る放れ牛の面倒をみようというプロジェクトを立ち上げ、NPO法人化する予定だ。正式名称は「福島再生と未来を考える がんばる福島」となる予定。本人の思ったほどではないというが、寄付金が少しずつ集まっている。ちなみに、松村さんの遠い祖先は、檀家となっている近所の真言宗寺院の住職をしていたとのことだ。停電対策にと、太陽光充電でランタンなどの充電ができる優れものも寄付された。

「初めは牛の面倒を見るつもりはなかった。イヌ、ネコだけにエサやりをしていたのが、今では生き残った牛も引き受けてしまった」と松村さんは話した。松村さんの活動は町から避難した友人が[専用のブログ](#)（「ときぶー



[の時間](#)」)を立ち上げて発信するようになり、海外にも広まった。ペット用のエサが余るほど届いていた。インスタントラーメンや缶詰類などの食料と飲料水も一人では食べきれないほど届いていた。私が伺った時期は、谷あいの細長い水田地帯に牛を囲い込む柵を設置するなどの作業で、自宅に寝泊まりして生活していた。昼はインスタントラーメン、夜はご飯に缶詰のおかずのパターンらしかった。夜はロウソクの灯りだけでも何とか生活できるようだ。長い夜にはアルコールも欠かせない。二羽のダチョウもフェンスを作って飼う。一羽は車のあとを着いてきたといい、一羽は放浪しているところを捕獲して飼うようになったという。

野良猫を見つけると道路端にエサをやる。決まった家の倉庫などにエサを置く日課だが、カラスの目につくところに置いてもカラスに食われるだけだと、置き場所は限定して住民が設置した倉庫内のエサ筒にエサを補充する。

数匹のネコが集まる場所。松村さんが呼びかけるとどこからともなく寄って、野良牛の群れを見つけると餌づけして慣れさせる。捕獲して移動する作業は時間がか牛を囲い込むための柵は未完成だが、囲い込みで無用の繁殖を防ぐため、オスとメスを二ヶ所に分け約200頭を目処に収容することを考えていると話す。水田の雑草は牛たちがきれいに食べてくれるので、農地の荒廃を防ぐ狙いもある。当面の土地は両親や親戚が米作りをしてきた水田などを利用している。

現実には、警戒区域内で100頭の牛を生かすことも楽な取り組みではない。膨大なエサ代や運搬用トラックなどの機材に必要な資金と人材を確保して継続することは至難のわざだろう。しかも、松村さんはインシシは飼っていたが、本業は建設業で畜産家ではない。松村さんが取り組もうとしていることは、殺生は嫌いだという感情からの東電原発事故の尻拭いとなりそうだ



本来は東電及び国が、生き残っている牛たちを殺処分せず、しっかりと保護し、被曝研究なり除染研究なりに活用し、生かす方策を考えるべきではないかと思う。原発事故は国策で推進され、「安全神話」のウソを言い続けた国と東電による人災事故だったのは明白だからだ。

○「石松」のその後お産の翌日、母牛と石松は寄り添っていたがオッパイを飲んだ様子は伺えない石松は前日よりもしっかりと歩けるようになっていたが、母牛の気ままな移動に後を追うだけ。松村さんは「石松」を抱きかかえて、出ないオッパイの代わ

りに赤ちゃん用の粉ミルクで代用することにした。遠藤さんが入手してきた粉ミルクを、湧かした水を冷まして溶かし、石松に与える松村さん。ゴクゴクと飲み始めたら一気に飲み干し結局、母牛のオッパイを吸うこともできないため、石松は松村さんの自宅に運ばれた。被曝した牛たちを警戒区域の外に移動することは禁じられているため、獣医が来てくれない限り、獣医に見てもらうこともできないのが現状だ。毎日粉ミルクをたくさん飲ませて面倒みないと、未熟な石松が生き延びることは難しいだろうというのが実感だった。加えて、森に隠れたり、牛舎の隅

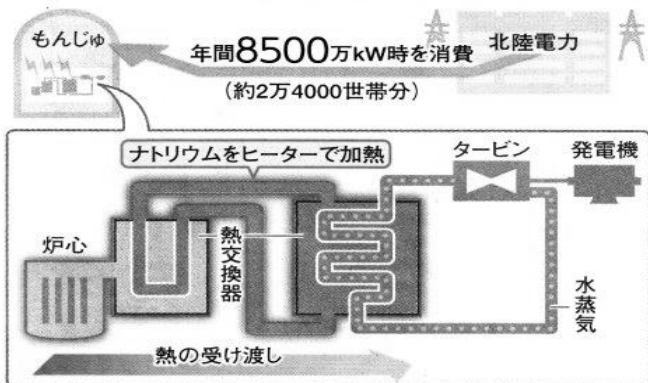
に身を潜めたりと衰弱した母牛には死が迫っていると思ったほどだ。私が撮った「石松」の最後の写真がこれ。私は翌日の二本松市の取材があるため、4月19日の夕方には富岡町を離れた。

○最後に原発事故と原発に関しての松村さんのコメントを紹介しておきたい。

「事故前から放射能は何度も何度も洩れていたんだ。まだ事故が収束していないのに再稼働って。政府は何を考えているのか、あきれかえる。もう一度事故と起こしたら日本はもうダメだぞ。新しいエネルギー開発に取り組むべきだろうが。」

消費電力 年2万4000世帯分

維持するだけでも膨大な電力を使う「もんじゅ」



夏に向けて電力が足りなくなると心配される中で、発電もしないのに、膨大な電力を消費しているだけの施設がある。日本原子力研究開発機構の高速増殖原型炉もんじゅ（福井県敦賀市）。浪費する電力は年間八千五百五十万kWhと、ざっと二万四千世帯分の電力をまかなえる量だ。（大平樹）

もんじゅ電気食うだけ

もんじゅは、原子炉で出た熱を液体ナトリウムで受け渡し、蒸気をつくる。ナトリウムは水より熱伝導性が高いが、冷めると固まってしまふ。そのため、作動していないときでも、ヒーターで二〇〇度まで熱して循環させる必要がある。抱えるナトリウムは計千六百七十ト、普通の小学校のプールおよそ三分。これを回し続けるだけのために電力を食う。電力の供給元は北陸電力。同管内では電力需給はそれほど厳しくないが、需給の厳しい関西電力に電力を融通している。関西の見通しでは、今夏のピーク時の電力不足は毎

停止中でも ナトリウム加熱に必要

もんじゅは、原子炉で出た熱を液体ナトリウムで受け渡し、蒸気をつくる。ナトリウムは水より熱伝導性が高いが、冷めると固まってしまふ。そのため、作動していないときでも、ヒーターで二〇〇度まで熱して循環させる必要がある。抱えるナトリウムは計千六百七十ト、普通の小学校のプールおよそ三分。これを回し続けるだけのために電力を食う。電力の供給元は北陸電力。同管内では電力需給はそれほど厳しくないが、需給の厳しい関西電力に電力を融通している。関西の見通しでは、今夏のピーク時の電力不足は毎時百五十三万〜五百七十万kWhにもなるという。もんじゅが電力を使わなければならない、もっと融通できる。ただ、関西電力の不足分が大きい。全てのヒーターを止めて融通に回しても不足分の0.2〜0.7%をカバーできるだけとの計算結果になった。もんじゅは一九九五年にナトリウム漏れ事故を起こして停止した。二〇一〇年五月に運転再開したのもつかの間、八月には核燃料の交換装置が故障して、再び足踏みしている。もんじゅは国策として進められてきた核燃料サイクルの中核的存在だが、大量の電力浪費が許されるのかどうか。国は今夏にも存廃を判断するとみられるが、これ以上の先送りも許されない。

時百五十三万〜五百七十万kWhにもなるという。もんじゅが電力を使わなければならない、もっと融通できる。ただ、関西電力の不足分が大きい。全てのヒーターを止めて融通に回しても不足分の0.2〜0.7%をカバーできるだけとの計算結果になった。